

## 〈2〉多世代をつなぐまちづくり ～ペデフェス！からの提言～

駒澤大学文学部地理学科 准教授 西山 弘泰

### 1 はじめに

学生は大きな可能性を秘めた存在である。その学生たちに対し、私たち大学教員は何をしてあげられるのか。筆者は、学生のあらゆる可能性に動機づけを与えることが、教員の重要な使命の1つと考える。つまり世の中で起こっているコトやモノに直接触れさせ、感動を与え、それらと学生とを結びつけることである。その感動を与えてあげるものの1つが、地域に無数にいる魅力的な人々である。

ここ20年ほどの間に、「地域連携」という言葉が定着した。一定の地域において、これまで関りの薄かった諸活動を行う主体同士が結びつき、地域活性化や産業イノベーションを惹起しようとする動きといえる（山田 2019）。その成果として、理系・文系問わず、大学と企業が連携することで、新たな製品やそれにつながるようなアイデアが生まれ、たびたび話題になる。

同時に地域連携は、学生にとって広義のキャリア形成の機会ともなる。宇都宮市北西部の大谷地区において地元自治会等と連携し、草刈りや災害ボランティア、活性化イベントなどの実施を報告した西山（2020）によると、これらの活動における学生側の成果は、①就職活動での利用、②コミュニケーション能力の向上、③主体性や実行力の向上であるとしている。

では、大学と連携した地域側が得られた成果とは何か。筆者は、地域課題に対するソリューションを大学や学生側が提供することではないと考えている。本稿では、2022年9月から10月にかけて

て、宇都宮駅西口地域で行われた「いちご一会とちぎ国体」のおもてなしイベント「ペデフェス！」を通して、地域が学生たちとどのように向き合い、何を得られたのかを論じていきたい。

### 2 「ペデフェス！」の概要

#### (1) 実施の背景

そもそも筆者の肩書に疑問を抱いた読者も多いのではないだろうか。筆者は2022年3月まで宇都宮共和大学シティライフ学部の専任講師として、学生とともにまちづくり活動に汗を流してきた。2022年度もそれまで担当していた3年ゼミの学生を非常勤講師として受け持ち、「ペデフェス！」をサポートした。

さて、2022年は栃木県にとって、42年ぶりの一大行事が行われた。それが「いちご一会とちぎ国体」である。2020年度の鹿児島国体と2021年度の三重国体は、新型コロナウイルスの影響により中止され、3年ぶりの開催となった。その国体開催期間に合わせ、来訪した大会関係者や観客に対し、おもてなしをすることを目的に企画されたのが「ペデフェス！」である。

これまでも行政や地元の商工会議所などが中心となり、国体のおもてなしイベントが開催された例はある。しかし、この「ペデフェス！」は、学生が中心になり、地域を巻き込んで実施した日本初のイベントである。また、運営資金を行政だけに頼るのではなく、企業協賛を募り、イベントの財源を自ら汗をかいて集めたことも特徴といえる。さらには、様々な装飾やイベントを、仲間になった市民や企業、行政などの指導や協力のもと、自分たちで創り上げた。それはこのイベントのローガンである「私のまちは私がつくる」に由来する。すなわち、まちづくりを行政だけに頼るのではなく、多様な組織、個人が手を携えて地域の課題に向き合い、行動する機運を醸成する。これこ

そが本事業の目的の根底にあった。そのため「国体のおもてなしイベント」というのは建前であって、国体と言う名や機会を利用したに過ぎない。

## (2)「ペデフェス！」の企画

まず、「ペデフェス！」の実施に至る経緯を説明する。筆者は2019年ごろから宇都宮駅西口周辺の可能性に着目し、同ペデストリアンデッキの再整備に関する提案や近くを南北に流れる田川の実践的な利活用提案などを、地域住民や企業などと連携しながら行ってきた。特に2021年度に宇都宮市創造都市研究センター<sup>1</sup>の学生ゼミで行った活動が地域住民や周辺企業、行政などから高い評価をいただき、事業の継続を望む声を生んだ。そうした経緯から、2022年3月に西口地域のまち歩き&ワークショップを実施した。その際「学生を中心とした地元自治会や企業、NPO、行政などが連携した集まりが必要である」との提案が地元住民などからなされ、「西口懇談会」を発足させるに至った。なお、懇談会の主な構成メンバーは、宇都宮共和大学シティライフ学部西山ゼミを主体とする学生、築瀬地区の住民、宇都宮駅西口地域の地権者や企業、まちづくりNPOの会員、その他一般市民（宮の朝カフェ<sup>2</sup>参加者が中心）、宇都宮市職員<sup>3</sup>など約20名である。

西口懇談会の特徴は、宇都宮駅西口の課題や活性化策を話し合うだけでなく、課題解決のためのアクションを学生中心に起こさせ、それを教員や地域が支えるという体制が確立されたことにある（写真1）。2022年4月以降、月1～2回の頻度



写真1 西口懇談会の様子

2022年7月筆者撮影

でミーティングが行われ、宇都宮駅西口地域の課題や活性化のアイデアがいくつも出されたものの、実際のアクションには結びつかない状況が5月まで続いた。

そのような中、筆者の知己であった宇都宮市国体・障害者スポーツ大会局（以下「国体局」という）の坂井香林氏から「国体に合わせて、宇都宮市の顔でもある宇都宮駅ペデストリアンデッキでおもてなしイベントを行ってはどうか？」という相談があり、学生たちに投げかけてみた。国体という国家的催事に関連した事業を担えることについて、学生たちの反応はすこぶる良好で、実施する運びとなった。これには、西口懇談会のメンバーの存在が大きかったと今さらながら感じる。というのも、西口懇談会で学生たちに投げかけた時に、地域のメンバーから「技術や資金、地域への根回しなどで最大限のサポートをするよ！」というエールやそうした雰囲気があった。こうした有言・無言の空気が学生たちの主体性と奮起を促した。

さて、5月以降、「ペデフェス！」の企画が開始された。これまでと同様に、西口懇談会において、①企画立案→②企画提案→③地域や行政との意見交換→④企画修正→⑤企画提案という行程を3サイクルほど重ねた。この過程のポイントは、意見交換後の修正段階で、西口懇談会のメンバー

1 宇都宮市創造都市研究センターとは、2017年に設立された、宇都宮共和大学、作新学院大学、帝京大学宇都宮キャンパス、文星芸術大学と行政、NPO、企業などが連携するプラットフォームである。

2 毎週土曜日の朝8時から市内中心部で行われている市民の集まり。参加者でテーマを持ち寄り、ディスカッションが行われる。現在、多田ひろ子氏が世話人を務めている。筆者は10年前以上前当イベントに参加している。

3 主に国体・障害者スポーツ大会局の職員3名と市街地整備課西口整備グループの職員2名である。



による個別のフォローがあったことである。例えば、西口懇談会のメンバーで、栃木県デザイン協会の会員でもある宇賀地裕子氏が、終了後や後日、企画の修正について個別に指導や相談に乗ってくれた。また、ペDESTリアンデッキ上でイベントや展示を行う際には、管理者である宇都宮市道路管理課との調整が必要になるが、そうした関係部署への下話や事前相談の付き添いを国体局や市街地整備課の職員などが担当してくれた。筆者はこれまでの経験から、社会の仕組みやルール、技能的な知識に乏しい学生にとって、こうした見えない壁や不安が、最初の一步を阻む障壁になっていると考えていた。大規模プロジェクトであるが故、教員である筆者もすべてをサポートすることは不可能である。精神面だけではなく、こうした実施過程における目に見える伴走こそが、企画から実行へと移行する際の支えとなった。

### (3) 実施までの経過

6月17日の西口懇談会において、①黄ぶな広場の制作、②おもてなし路上ライブの実施、③飲食イベントの開催、④宮竹灯ろうの制作、⑤プロジェクションマッピングの実施、⑥顔はめパネルの制作、⑦駅ピアノの設置、が決定された<sup>4</sup>。しかし、これらすべてを学生中心に実施するのは難しい。

地域や行政からのサポートは絶え間なく続く。黄ぶな広場の制作に関しては、栃木県デザイン協会の全面的な協力のもと、当会に所属するデザイナーの宇賀地裕子氏と建築ディレクターの古溝政利氏にデザインや設営の指導をいただくことになった。また、飲食に関しては、かつてデッキで飲食イベントの経験がある「地元とちぎの酒で乾杯フェスタ実行委員会」（県内の酒造会社、クラブ

トビール製造者で構成される組織）に飲食イベントを行っていただくなど、様々な組織の協力を取り付けた。

そのような中で結成されたのが「ペデフェス！実行委員会」（以下、実行委員会）であった（図1）。

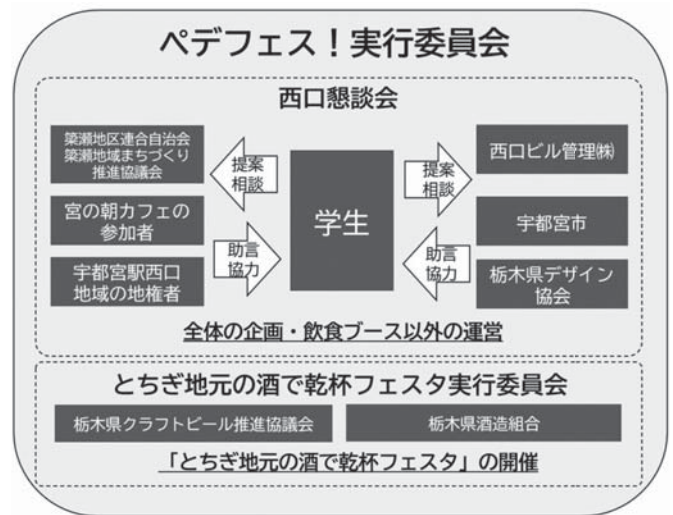


図1 ペデフェス！実行委員会の構成

筆者作成

実質的には学生中心でありながらも、地域への敬意と市民主体のまちづくりを体現するため、会長には築瀬地域まちづくり推進協議会および築瀬地区連合自治会の会長である栗原伸一氏に就いていただき、筆者とゼミ長の石川が副会長になった。会長就任の願いは、何の根回しもせず、筆者と石川が直にお願いした。依頼に際し、栗原氏は数秒の間において「はい。わかりました」とゆっくりとうなずきながら引き受けてくれた。多くの作業は学生が担うにしても、会長になれば何かあった時の責任が問われる。それでも引き受けたのは、学生たちを応援したいという一途な心意気からであろう。

実行委員会が結成されたのが8月後半であった。その直後8月31日に実行委員会結成と「ペデフェス！」の説明のための記者会見を行った。記者会見には、新聞社3者が訪れた（写真2）。本来、周知が目的であればわざわざ記者会見などする必

4 事業の詳細については、宇都宮市HPの「大学生によるまちづくり提案発表会2022」（<https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/shisei/machi/kenkyu/renkei/1030544.html>）を参照のこと。



写真2 記者会見の様子

2022年8月筆者撮影

要はない。

この記者会見は「学生に大舞台を用意してあげたい」という実行委員会メンバーの配慮であった。プロジェクトの概要説明や質疑応答は、すべて副会長の石川が行った。正直、すべてを学生に委ねるとするのは不安も多い。しかし、石川は堂々と概要説明し、質疑にも応えていた。石川や他の学生にとっては、大勢の大人の前で話す機会がめつたにない。こうした機会を温かい眼差しで見守っていただいた実行委員の方々に感謝したい。

先述のように「ペデフェス！」では、黄ぶな広場の設置をはじめ、様々な装飾やイベントを行った。その中でも、黄ぶな広場の設置に利用する黄ぶな<sup>5</sup>がプリントされた宮染めの制作に最も多くの時間を割いた。

そもそもどうして宮染めに黄ぶなをプリントしたのか。6月の西口懇談会でメンバーの一人から「コンセプトをはっきりさせなければいけない」との意見が出た。西口懇談会のメンバーでコンセプトについて議論したところ、まず「宇都宮駅西口地域最大の特徴は田川である」ということになった。次に宇都宮の歴史を考えると「豊かで清らかな河川水や湧水に恵まれた土地」であるという意見も出た。そして、その恩恵により宇都宮市の

伝統工芸である宮染めが生まれた。また、山岳地帯から流れてくる豊富な水資源も多くの工業団地や工場が立地する一つの要因になった。こうした意見がメンバーから次々に出た結果、「川や水」そして「田川」を装飾のコンセプトの1つに据えることが決まった。それが「青色に染め上げられた宮染めをペDESTリアンデッキに垂らす」という発想につながったのである。さらに、その宮染めに「新型コロナウイルスの退散を祈って黄ぶなをプリントする」ということで最終案がまとまった。装飾のコンセプトを明確にすることや、それを考案する際のアイデアはおそらく学生や筆者だけでは思いつかなかつたに違いない。ここでも地域の知識やアイデアが発揮された。

コンセプトや宮染めを使うことは決まったが、どのような黄ぶなのデザインにするかが課題となった。オリジナルの黄ぶなをプリントするにしても、同じものでは芸がない。そこで①実行委員会のメンバー描いた黄ぶな、②宇都宮共和大学の学生が描いた黄ぶな、③地元保育園の二葉幼稚園の年長組園児が描いた黄ぶな、そして④企業や個人が所有しているオリジナル黄ぶな、を集めることにした。これによって38のオリジナル黄ぶなを載せることができた。

最も人手が必要な作業が220mにもなる宮染めに、黄ぶなを添付する作業であった。まず、生地にアイロンを使って添付できる専用の用紙に様々な黄ぶなをプリントしていく。次にプリントされた部分のみをハサミで切り取る。切り取られた黄ぶなをアイロンで接着していく。この作業にも、栗原会長はじめ実行委員会のメンバーが加わった。同時に若山農場の竹を利用した竹灯ろう40本の制作も行った。両作業は9時から開始され、学生の指導のもと、談笑を交えながら17時まで行われた(写真3)。

5 無病息災を祈願するための張り子のフナ。また宇都宮市の伝統工芸品でもある。

#### (4) ペデフェス！の開催





写真3 宮染めに黄ぶなを添付する作業

2022年9月筆者撮影

9月30日16時から会長である栗原氏の挨拶を皮切りに「ペデフェス！」がスタートした(写真4)。その後、黄ぶなのデザインでお世話になった二葉幼稚園の園児が、とちまるくんとともに国体ソングに合わせダンスを踊り、超満員の観衆とともにボルテージは最高潮に達した。マスコミもNHKやとちぎテレビなどが取材に訪れ、注目の高さを実感した。その後のライブイベントでも、常に観客が50~100人はおり、多くの方々にイベントを楽しんでいただくことができた。

飲食店も行列や売り切れが続出した。クラフトビールを販売した業者に1日目の売上を聞いたところ15万円を売り上げたという。3日間晴天に恵まれたことも幸いし、すべての出店者の方々に満足のいく売り上げを出してもらうことができた。2, 3日目の昼間には、家族連れで訪れる方々がかなり多かった。ベンチに座り、露天で購入したビールや焼きそばを食べながら、音楽に耳を傾ける姿が多数みられた。家族連れの方と話をしたが「こうしたイベントを毎週やってもらえるとありがたい。これからも続けてほしい！」とエールを送っていただいたのが感動的であった。また、露天の売上げが上々だったこと、家族連れをはじめ様々な世代が訪れ楽しんでいただけことから、コンディション次第ではペデストリアンデッキが人々の集まる憩いの場として、そして交流拠点として

機能することを証明できた。

学生主体を旨としていたことから、会長の挨拶以外、実行委員会のメンバーには、特に役割分担について指示はしていなかった。ところが実行委員会のメンバーたちは、人員が手薄な警備や客寄せなどを、主体的に担当してくれていた。学生たちが足りない部分を、何も言わずにさりげなく行う。普通であれば、危うさがある学生たちに対し、あれやこれやと注意したり、命令したくなるはずである。奮闘する学生たちを陰ながら支える姿勢に、教育のあるべき姿をみたような気がした。



写真4 ペデフェス！当日の様子

2022年9月筆者撮影

### 3 地域に与える「ペデフェス！」の効果

「ペデフェス！」の期間中、大きなトラブルもなく、来場者からの評判も上々であった。これだ

けでも「ペデフェス！」は成功だったといえる。しかし、筆者は当事業の本当の価値は、メンバー全員が「イベントを開催してよかった」と感じたことだと思っている。では、なぜ「良かった」と感じたのか。学生にとっては達成感を得られたことや、事業の準備における様々な経験や人との出会いが大きな財産になった。一方で、学生たちをサポートした地域は何を得られたのだろうか。本章では、「ペデフェス！」の意味や効果を地域側の視点で考えていきたい。なお、ここでいう「地域」とは、実行委員会の主要メンバーとなった西口懇談会のメンバー（行政を除く）を指すこととする。

#### (1) 地域との関わりにおける大前提

そもそも西口懇談会は、3月のまち歩きによって突如結成された集まりではない。それには確固とした下地があった。西口懇談会の中核的なメンバーは、すべて筆者とまちづくり活動を通して、信頼関係を築いてきた方々であった。そうした関係性の中で、学生たちの性質や筆者の考え方を理解し、サポートを喜んで引き受けてくれる人物を見定め、西口懇談会に誘った。

例えば、NPO法人宇都宮まちづくり推進機構の会員で郷土史家の坂本明氏とは5年以上の付き合いになる。彼は飲み友達でもあり、お互いの性格や性質を熟知している。また、小袋町自治会<sup>6</sup>の会長でもある栗原伸一氏と副会長の松本和彦氏、音響や機材の貸出などでお世話になっている西口ビル管理(株)<sup>7</sup>の山室政史氏、ララ・ステージ事務局の樋山崇氏は、田川での活動から度々関わるようになり、信頼関係が築かれていた。栃木県デザ

イン協会の宇賀地裕子氏も、もともとまちづくりや都市の歴史に関心が強く、NPO法人宇都宮まちづくり推進機構にも所属している。さらに「宮の朝カフェ」で知り合った多田寛子氏や大川路弘氏、ピーター・スミス氏もまちづくりや若者の育成に関心や理解を持つ人物である。つまり、これらの方々は、自分の金銭的な利益や栄達を第一義とせず、他人の喜びを自分の喜びと捉えることのできる人物である。

「ペデフェス！」はゼミ活動の一環であるという性質上、主眼は学生の教育にある。よって、まちづくりに関わりたい人間であれば誰でもよいわけではなく、こうした理念に共感・賛同してくれる人物をあらかじめ見極め、厳選することが組織づくりの要点となる。

#### (2) 地域は学生から何を得るのか

本稿を執筆するにあたり、2023年1月27日に西口懇談会のメンバー5名に集まっただき、「ペデフェス！」に関わった理由や自分たちへの効果について、2時間程度のヒアリングを行った。無論、それぞれ関わった経緯や背景、目的は多少異なるものの、ヒアリング結果は以下のようにまとめることができる。

- ①地域には若者が少なく学生がいるだけで元気をもらうことができる
- ②若い人に相手にしてもらったり、話を聞いてもらえたりすることがうれしい
- ③次世代に活躍してもらわないと、自分たちの将来も危うくなる
- ④年配者はでしゃばらず若い人たちに求められることをしてあげればよい
- ⑤自分たち年輩者が後輩をサポートすれば、それがさらに下の世代へと連鎖していく

では以上のような発言には、どのような背景や

6 宮の橋西詰一帯を範囲とする単位自治会。2023年時点で約80世帯が加入している。地域の歴史は古く、江戸時代までさかのぼる。

7 宇都宮駅西口駅前の大型商業施設「トナリエ宇都宮」などが入居する開発ビルを管理する会社。ララ・ステージ事務局は社内を設置されたイベント管理の部署



思いがあるだろうか。第1には、地域の人口減少や高齢化による危機感があげられる。実行委員の栗原氏が自治会長を務める小袋町自治会も、加入世帯のほとんどが65歳以上であり、子どもがいる世帯が皆無であるという。やはり歳を重ねると体力的にできることは限られてくる。しかし、愛着がある地域を盛り上げたいという気持ちは若者に負けないくらい強い。そこに学生が加わることによって「もしかしたら地域を元気にできるかもしれない」という希望が生まれる。また、学生をサポートすること自体が元気の源となる。

第2に、若者に利用されることの喜びである。これは孫にお小遣いをあげた時の喜びに似ているかもしれない（筆者はまだわからないが）。多くの方は、他人から必要とされたり、敬意の念を抱かれたりすることを欲している。つまりマズローの欲求5段階説の「承認欲求」である。若者が自分たちを必要な存在として頼ってくることは嬉しいことはない。しかもそれが財産や地位などの物質的なものではなく、経験や知識などの内面的な部分が必要とされればなおさらのことである。活動に参加することは、自分が社会とつながり、まだまだ必要とされている存在であることを確認する機会なのだ。学生は彼らに生きる喜びを与える存在である。

第3には、まちづくりとは若者を育てていくことということである。これはある意味当たり前のことのように思うが、その当たり前のことができていないのが現在の日本である。これは政治の世界を例にとるとわかりやすい。年齢がすべてではないにしても、80歳を超えた国会議員が未だに要職に就いている。いつまでも一定の地位にしがみつき、いわゆる「老害」をまき散らしている。こうした事態は、筆者の身近なところでも起こっている。確かに年齢を重ねると将来に対する不安が増し、これまでの地位にしがみつきたくなる。しかしそのことによって、将来ある若者を無用に

利用したり、足を引っ張ったりして、社会の発展を妨げていることを理解してほしい。

では若者を育てるまちづくりとは何か。それは年輩者（ここでは「大人」ともいう）たちが若者の求めや、やりたいことを裏でサポートしてあげること、そして彼らを主役にし、輝かせてあげることではないだろうか。若者を主役にすることは不安も多い。しかし失敗が少ない裏方ばかりやらせていては、いつまで経っても裏方しかできず、人材が育たない。失敗しても良いから、どんどんチャレンジさせ、責任は年輩のしかるべき者が取ればよい。若者が失敗したとしても何も言う必要はない。どうして失敗したのかは若者が自分で考えればよい。それよりも、責任を取ったり、金銭を提供したり、良かったところは褒めたたえ、次につながるよう調子づかせるのが年輩者の仕事ではないだろうか。

若者たちが様々な経験を積み、活躍することは年輩者たちにとって不利益にはならない。結局、年齢を重ねれば重ねるほど、できることは限られてきて、結局は若者たちに助けてもらうことになるからである。年金の仕組みがそれである。後輩たちが活躍してくれば、社会や地域が良くなり、それは自分たちの安定した老後を保証することになる。若者たちを上手に利用することが、都市の持続的な発展につながっていく。

実は筆者もこの論考を執筆中にそのことを考えさせられる出来事があった。それは他愛もない出来事であるが、筆者にとっては新鮮であった。学生が2023年2月にさくら市においてイベントを行った。イベント終了後、撤収作業の過程で砂や塵を大学の廊下やエレベーターに散らかし、それに気が付かずそのまま帰ってしまった。後日、学生たちに注意をし、行いを改めさせるのが一般的な指導であろう。おそらく、「ペデフェス！」を経験していなければ、筆者もそうした指導を行ったに違いない。しかし、よく考えてみると、筆者

もかつて大学生だった頃は、この学生たちと同じであった。おそらく、大人たちが筆者らが散らかしたものを何も言わずに片付けていたかもしれない。

以上のエピソードや対応について、賛否両論あるだろう。しかし、筆者たち年輩者のすべきことは、学生たちが楽しく、一心不乱になってまちづくり活動を行う環境を整え、彼らを輝かせることである。彼らのできていないことや苦手なことを1つ1つ挙げて、行いを正すことではない。それはしかるべき時期に学生自ら気づき、正せばよい。「これはダメ」「あれはダメ」と行く手を阻むことで、学生たちは委縮し、彼らの可能性が萎んでしまう。それは彼らにとっても不幸なことでもあるが、将来の日本にとっても不利益である。砂が散らばっていると云っても、限度を超えるものではないし、筆者が掃き掃除をしても1分で終わる。学生の可能性は無限大である。彼らのどこまでも広がる可能性に対し、目の前の砂は実に些細である。そう考えると、砂の掃き掃除は、筆者たち年輩者の仕事ある。筆者もサポートされつつも、サポートする側に立っているのだと考えると非常に感慨深い。

## 4 世代による分断を乗り越えて

「隠居」という言葉がある。これは家業や官職から退き、ひっそりと余生を過ごすことを指す。隠居は実によくできた教育システムである。次の世代に主役を担わせることで、次世代が育っていく。いつから日本人は、自らの立場をわきまえず、隠居という言葉忘れてしまったのか。こうした振る舞いは、今、世界中に蔓延っている「自分さえよければいい」という新自由主義に根差した、行き過ぎた競争社会の末路といえよう。世界は今一度、社会をより良い方向に導くために、若者に活躍の場を与えなくてはならない。そうしな

ければ、世界は破滅の方向に進んでしまう。持続可能な世界や地域社会を構築するためには、年輩者が若者を自分の良いように酷使するのではなく、彼らのために自らの時間や労力、金銭をつぎ込み、育てなくてはならない。それが世代間で連鎖していくことで、持続可能な社会が実現される。今、ロストしてしまった人と人との信頼や支え合いのバトンを、筆者らが拾い上げ、次の世代に渡してあげなければならない。

「ペデフェス！」では、学生たちと地域が双方に支え合う仕組みを見事に描き出し体現できた。若者たちは大人たちの適切かつ適度なサポートのもと、大舞台で輝くことができた。大人たちは、学生たちを輝かせることで自分たちの存在価値を見出すことができた。こうしたあるべき大人の姿を目の当たりにした学生たちは、必ず次の世代と同じことを繰り返すだろう。「ペデフェス！」はそうした流れを再び取り戻すスタートラインになった。こうした世代間の連鎖が市内のあちこちで発生するよう種をまいていきたい。愛する宇都宮のために。

## 参考文献

- 山田浩久, 2019, 「大学教員による地域連携活動」『地域連携活動の実践—大学から発信する地方創生—』11-28
- 西山弘泰, 2020, 「学生たちは地域社会貢献活動を通して何を学ぶのか—大谷地区における景観維持活動から—」『宇都宮共和大学都市経済研究センター年報』20, 147-171